



JSPS London

NEWSLETTER

No.76
2024 Autumn



Aurora borealis (Northern Lights) at Essex in 10th October 2024 by Polly Watson

Contents

- 1 センター長の英国観望
第13回 「創立30周年を迎えて(2)」
- 5 巻頭特集/Feature: 第6回JBUKサバイバルセミナー
- 8 JBUK (Japanese Researchers Based in the U.K.)
在英日本人研究者の紹介
- 10 Alumni Association の紹介
- 12 Bridge and Symposium & Seminar Scheme の紹介
- 14 在英研究者の者窓から :
第34回 小館尚文 University College Dublin
- 17 Voice! from Alumni member:
Vol.33 Dr Goran Vladislavljević
Loughborough University
- 19 英国の機関紹介
Knowledge Quarter London
- 20 Events organised/supported by JSPS London
- 21 JSPS Fellowship Programmes &
International Collaborations Application Schedule

センター長の英国観望

第13回 「創立30周年を迎えて(2)」

ロンドン研究連絡センター・センター長
小林 直人



1. はじめに - 創立30周年記念行事

9月3日、4日にJSPSロンドン研究連絡センター創立30周年およびJSPS英国・アイルランド同窓会(Alumni Association)創立20周年記念行事を無事終えることが出来ました。関係者の皆様のご協力に心から感謝申し上げます。またご参加の皆様からは温かなご好評を頂き、大変有り難く感謝申し上げます。

9月3日にRoyal Societyで行われた創立30周年記有識者交流会では、JSPSの水本哲弥理事のご挨拶の後、Royal Society副会長のSir Mark Walport、日本大使館の川上恭一郎公使、UKRI (UK Research Innovation)を代表してProf. Christopher Smith、AMS (Academy of Medical Sciences)会長のProf. George Griffinなどから、ご祝辞並びに今後の日英協力のあり方に関する貴重なご意見を頂きました。またImperial College Londonの高田正雄先生、University College Londonの大沼信一先生からは、両大学におけるこれまでの日英協力の歴史などのお話をお聞きすることが出来ました。また両大学の副学長クラスの先生にもご出席頂きました。このように英国を代表する研究助成機関や大学の皆様と一同に会し、密接に意見交換をする機会が持てたことは素晴らしいことでした。特にCovid-19以来やや停滞していた組織間の対話を再び活性化することに極めてよい機会だったと、その意義を大いに感じています。

一方、9月4日のオックスフォードのアシュモレアン博物館で行われた記念行事では、当センターの創立30周年記念に加えて、同窓会創立20周年を祝いました。当日は内外の研究助成機関、大学関係者、同窓会員や在英日本人研究者約100人の方のご出席を頂き、Royal Society副会長のProf. Alison NobleやProf. Roger Goodmanの講演に加えて、自然科学系と人文・社会科学系の同窓会員(Prof. Peter Norreys とProf. Ekaterina Hertog)がそれぞれ“Plasma Physics” と“Digital Sociology”に関する講演をされました。お二人とも現在でも日英の共同研究を継続されており、大変意義深い内容の講演となりました。

また講演以外では、「今後の日英の国際研究協力のあり方」に関するパネル討論が行われました。その中では「ネットワーキング」、「継続性」、「データの共有」などが特に重要であるなどの意見が注目を惹きました。さらに同窓会創立記念行事として、JSPSが提供したフェローシップやシンポジウム・スキームを活用して日英研究協力で大きな成果をあげた4名の同窓会員の方々を表彰する同窓会賞贈呈式が行われました。

今回は2日間にわたり当センターと同窓会の創立記念行事を同時に開催しましたが、その相乗効果により、さまざまな機関、大学、多くの研究者などの間の密接なネットワークを強化できました。この大きな成果を踏まえ、今後さらに日英研究協力の発展に向けて前進したいと考えています。



図1. Royal Societyでの交流会の後の集合写真。



図2. アシュモレアン博物館での創立記念行事後の集合写真

センター長の英国観望

2. 英国の大学の昨今のいくつかの話題

英国の大学はBREXITの影響で種々の変化が起きており、特にEUからの新入生が半減したことを報告しましたが、今年になってさらに減り続け、その数はピークの約4割となっています [1,2]。一方、対照的にアジアからの留学生が増え続けていて、2022/23年度はインドからの留学生の人数が中国からのそれを追い抜いてトップになりました。図3にインドおよび中国出身の在校生の数の変化を示しますが、インド出身の留学生数が173,190人に対し中国出身者は154,260人となっています。しかも僅か4年前にはインドからの留学生が中国からのその約1/5しかいなかったため、その急増振りは目を瞠るばかりです。

さらに注目すべきこととして、インド出身の留学生は学部生の数に比べて大学院生の数が圧倒的に多いことです。これはインドで大学を終えて留学する人が多いことを意味します。2022/23年度ではその比は約1:5ですが、中国出身の留学生の場合は1:1.3です。一方、英国人も含めた全学生ではその比は約2.3:1ですから、インド出身の大学院生の多さは大きな特徴でしょう。

さて留学生の数に関して現在話題になっていることは、2024年1-7月の留学生の応募数が前年同時期のそれに比べて16%も減少したため、将来的に大きな収入減が予測されることです [3]。ご存知のように留学生は支払うべき授業料に上限がなく、平均して英国人学生の2倍以上の額の授業料を支払っています。

これに加えて2023年には最高11%に達したインフレのために英国の大学の財政状況が急速に悪化しています。すでにイングランド南東部、北部などの地域の大学が大きな影響を受けているとの報告があります。このような大学の経済的危機は地域経済

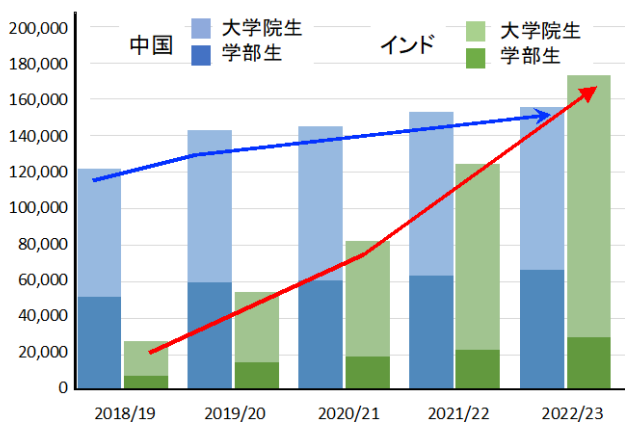


図3. 英国の大学における中国およびインド出身の留学生数

に大きな影響を及ぼす可能性があります。このため英国大学協会 (Universities UK; UUK) は最近政府に対して、留学生の増加を抑制する代わりに、2017年以来上限9,250ポンドに抑えられている授業料上限をインフレ率に連動して値上げすることを要請しました。政府はまだ確約をしていませんが、来年度には値上げが実現するものと見られています。

最後は英国の「量子技術」に関する最近の話題です。すでに昨年には英国の量子技術の研究開発を効率的に進める英国の「量子戦略」についてご報告しましたが [4]、政府はそれを加速させるために今回1億6,000万ポンドの投資を行い、新たに5つの量子技術ハブの開設を支援しました [5]。その5つのハブの目標と具体的な名称は以下の通りです。

(1) 医療診断の変革

・量子バイオメディカルセンシング研究ハブ (Q-BIOMED)

リーダー; Rachel McKendry教授 (UCL)、Mete Atatüre教授 (ケンブリッジ大学)、予算; 1,080万ポンド (約21億円)。

・量子技術センシング・イメージング・タイミングハブ (QuSIT)

リーダー; Michael Holynski教授 (バーミンガム大学)、予算; 2,750万ポンド (約54億円)。

(2) 安全な通信と未来のコンピューティング

・統合量子ネットワーク (IQN) 量子技術研究ハブ

リーダー; Gerald Buller教授 (ヘリオット・ワット大学)、予算; 3,170万ポンド (約63億円)。

・相互接続実装量子コンピューティング・ハブ (QCIC3)

リーダー; Dominic O' Brien教授 (オックスフォード大学)、予算; 2,240万ポンド (約44億円)。

(3) 堅牢なインフラ支援技術

・量子対応位置・ナビゲーション・タイミング・ハブ (QEPNT)

リーダー; Douglas Paul教授 (グラスゴー大学)、予算; 2,190万ポンド (約43億円)。

以上のプロジェクトの特徴は、量子センシング、量子通信、量子コンピューティング等の各技術の飛躍的向上とともに、早期の産業応用を目指していることです。一方、産業界では40社以上が加盟する "UK Quantum" というコンソーシアムが2022年に結成され、英国の量子産業を一つの声に結集して国際的に主導的な役割を果たすことを狙っています。このように世界的に熾烈な競争の中で、英国の大学も量子技術に関する基礎的な研究と同時にその産業応用に大いに意欲を示しています。

センター長の英国観望

3. オランダの大学訪問

JSPSロンドン研究連絡センターは、英国やアイルランドはもちろんのこと、それ以外にも、オランダ、ベルギー、EU本部などを訪問し、JSPSの活動紹介を行って積極的に国際研究協力の芽を育てることがその任務の一つとなっています。

その中でオランダにはCovid-19パンデミック以前も含めて相当の期間訪問が出来ていませんでした。今回、理化学研究所欧州事務所の市岡利康所長、在オランダ日本国大使館の中田惇子一等書記官からのお誘いやご紹介により、フローニンゲン大学とアムステルダム自由大学を訪問することが出来ました。

フローニンゲン大学は、アムステルダムから電車で2時間ほど北に進んだ位置にある人口18万人強の商工業都市フローニンゲンに、1614年に創立されたオランダでも2番目に古く、学生数も約33,000人(27%が外国人)を誇る大きな大学です[6]。

学部は11あり、優先的に取り組んでいる研究課題として、各学部の重点分野と大学が選んだ3つの社会的テーマ「健康な高齢化」、「エネルギー」、「持続可能な社会」があります。

訪問した当日には、Jacqueliën Scherpen学長やProf. Janny de Jongから大学の概要をお聞きし、理工学部、医学部などを訪問するとともに、午後のセッションでJSPSの活動紹介を行いました。このセッションにはPhD学生、ポスドク、中堅以上の研究者等が40名以上も参加され、日本大使館や我々の説明に対して多くの質問があり、関心の高さに変感銘を受けました。

同大学は従来より、大阪大学、京都大学、東京大学など日本の大学との交流も盛んでしたが、今回の訪問を機会により系統的に日本の大学との連携に寄与できるように、JSPSからもきめ細かい研究支援が必要だと感じました。



図3. フローニンゲン大学での午前の会合後の写真。
前列左から2番目がJacqueliën Scherpen学長。

一方、翌日訪問したアムステルダム自由大学は、都心から車で15分位南西に行った場所にキャンパスがある総合大学です。創立は1880年と比較的新しく、学生数は約32,000人、9つの学部で45の学士課程プログラム、100の修士課程プログラムが提供されています。大学が推進すべき戦略的テーマをProfile Theme と名づけ、その「つながる世界」、「社会のためのガバナンス」、「人間の健康と生命科学」、「持続可能性のための科学」の4つのテーマを中心に推進する活動を行っています [7]。

同大学は日本との共同研究なども積極的に行っていて、2013-2023年の10年間で123の研究グループとの共同研究を行い、307の共著論文を発表しています。それらが特に多いのは京都大学、東京大学、筑波大学、沖縄科学技術大学院大学などです。また研究交流の盛んな大学として早稲田大学、慶應義塾大学、北海道大学、関西外国語大学などがあるそうです。

JSPSの活動報告会では、Prof. Meike Bartels、Prof. Bart Bossinkがホスト役を務められ、約15名の研究者・ポスドク・博士課程の学生方が参加されました。日本大使館の発表の後に我々JSPSロンドンの活動紹介を行いました。発表後に多くの質問がありました。その中でも特にオランダでも同窓会を作りたいがどうすれば良いか、などの大変建設的な質問がありました。我々も是非積極的に支援をしたいと考えています。

なお当日アムステルダム自由大学訪問の前にハーグの日本国大使館を訪れ、中野大輔公使からオランダの科学技術の特徴などをお聞きすることが出来て大変有益でした。

今回のオランダの大学訪問では、英国とは異なる研究者の皆様との国際共同研究に関する熱気を感じました。是非今後密接な連携が進むように我々もしっかりと努力をしようと思います。

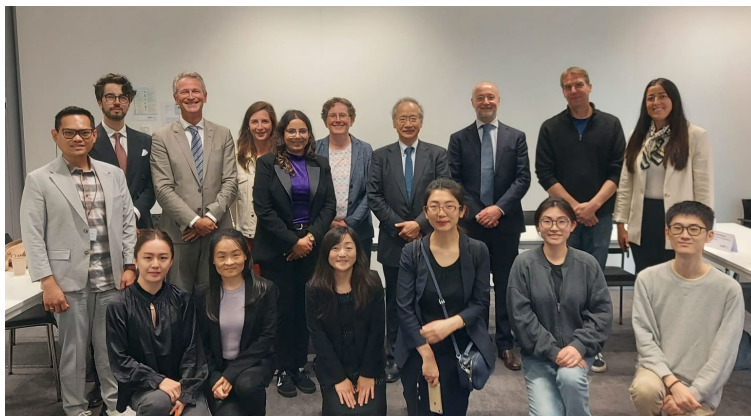


図4. アムステルダム大学でのJSPS活動説明会後の集合写真。
後列左から2人目がホスト役の一人のProf. Bart Bossink。

センター長の英国観望

4. アシュモレアン博物館について

英国では記念行事を博物館で開催することが多いのですが、今回オックスフォード大学のProf. Ekaterina Hertogにご紹介を頂いて、同大学のアシュモレアン博物館で当センター創立30周年と同窓会創立20周年の記念イベントを開催することができました。

アシュモレアン博物館はエアース・アシュモールという裕福な蒐集家がオックスフォード大学に寄贈した多くの所蔵品を元に1683年に開設された英国初の公立博物館で、世界最初の大学博物館だそうです。(ただし1671年開設のスイスのバーゼル美術館が世界初の大学博物館という説もあります。)場所はオックスフォード大学のほぼ中央近くに位置していて、科学史博物館、自然史博物館、ピット・リバース博物館とともにオックスフォード大学の4つの博物館のうちの1つとなっています [8]。

内部には先史時代のヨーロッパ、古代近東、古代エジプト、古代ギリシャ・ローマ、中世以降のヨーロッパなどの世界的な考古学的コレクションがあります。私は特に古代ギリシャ・ローマ時代の彫刻や陶器などが好きなのですが、図6の左下に示した芸術品を初め大変充実したコレクションがありました。

絵画も多くの種類のコレクションがあります。たとえば印象派画家であるマネ、モネ、ルノワール、ピサロなどの貴重な絵が展示されています。私が注目したのは、英国人のRobert P. Bevan(1865~1925年)という画家が1918年に描いた“Queen’s Grove”という街路の絵です(図6の右下)。実はこの街路は私の住まいのすぐ近くにあるのでよく通りますが、100年以上を経た今でもほぼ全く同じ風景が見られます。とても大きな驚きでした。

アシュモレアン博物館には楽器のコレクションも展示されています。特にバイオリンが多く、図6の右上に示した楽器は有名な

アントニオ・ストラディヴァリ(1644?-1737年)が絶頂期の1716年に製作したメサイアと呼ばれる楽器です。その極めて優れた保存状態で世界的に非常に有名な楽器だそうです。

また同博物館には多くの日本コレクションがあります。それらは陶磁器、絵画、木版画、刀剣類、仏像、漆器、など多岐にわたります。特に17世紀と18世紀の磁器コレクションは世界でも最も包括的なコレクションの1つだそうです。

同博物館は所蔵物の種類が多岐にわたり、その数も膨大です。機会があれば、是非一度訪問されることをお勧めします。

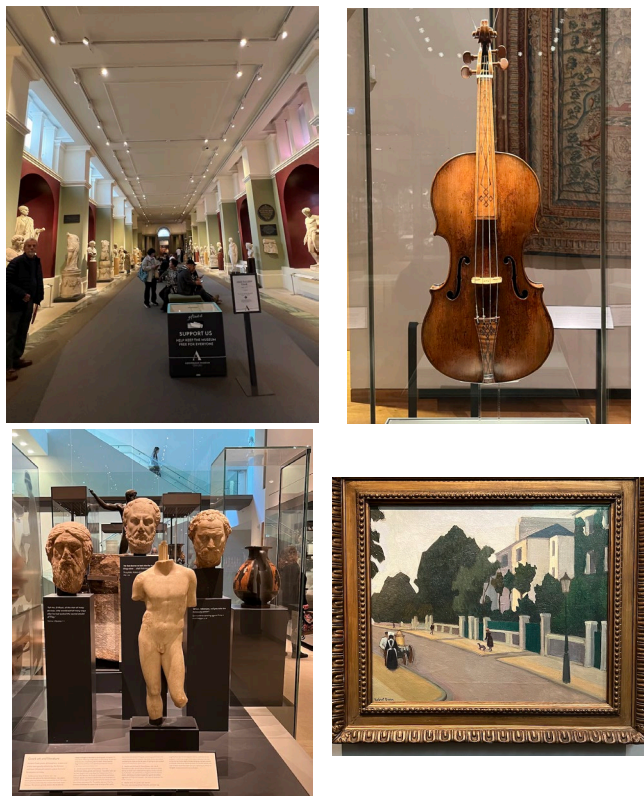


図6. (左上)博物館の内部、(右上)楽器ストラディバリウス
(左下)ギリシャ芸術、(右下)“Queen’s Grove”の絵

参考文献

- [1] https://www.jsps.org/jsps_newsletter/files/JSPSNL_73.pdf
- [2] HESAのデータ; <https://www.hesa.ac.uk/>
- [3] <https://www.hepi.ac.uk/2024/09/03/reduced-international-student-numbers-are-a-much-bigger-problem-than-you-think/>
- [4] https://www.jsps.org/jsps_newsletter/files/JSPSNL_72.pdf
- [5] <https://www.ukri.org/news/five-hubs-launched-to-ensure-the-uk-benefits-from-quantum-future/>
- [6] “University of Groningen”; <https://www.rug.nl/>
- [7] “VU Amsterdam”; <https://vu.nl/nl>
- [8] “Ashmolean”; <https://www.ashmolean.org/>



図5 アシュモレアン博物館の外観。

第6回 JBUK英国サバイバルセミナー

2024年7月4日に第17回在英日本人研究者会議(JBUK=Japanese researcher's network Based in the UK)である「第6回英国サバイバルセミナー」を開催した。

JSPSロンドン研究連絡センター所長の冒頭挨拶の後、高橋功一等書記官(在英日本大使館)より、昨今の国際研究交流の概況、日英共通の課題を踏まえて今後の連携へのさらなる期待について話題提供があった。基調講演として昨年度よりオックスフォード大学で研究をされている上田泰己先生(東京大学教授)より公衆衛生の観点から睡眠の研究に従事する英国および欧州研究者との交流を踏まえてご講演をいただいた。

続いて、英大学で第一線の研究をされている経験豊かな先生4名を招聘し、パネルディスカッションを実施した。主に日本人研究者が英国で研究者として独立、活躍するためのアドバイスや心構えについて、有意義な意見交換が行なわれた。本セミナーには若手から中堅の日本人研究者を中心に60名近くが集い活発な質疑応答があったほか、研究者同士がネットワーキングできるレセプションも提供した。

(1) 講師紹介

・ファシリテーター(司会進行役)

鳥井亮先生(UCL教授)

コンピューターシミュレーションを用いて主に心臓病のメカニズムの解明、診断方法や治療デバイスの開発にも従事。2003年東京大学で博士取得後アメリカ、イギリスでのポスドクを経て2012年よりUCLに在職。研究部門長として研究戦略の立案や人事採用、人事評価にも携わる。

・パネリスト

梅村真希先生(カーディフ大学准教授)

専門は経営史。アメリカの大学卒業後、法律事務所や新聞社での勤務を経て2008年LSEで経済史の博士を取得後カーディフ大学で勤務するが当初所属していたセンターが廃止されたことを機に2013年から同大学ビジネススクールに配属された。主にバイオテクノロジーや再生エネルギーを事例として研究しており、アメリカやパリでの客員研究の経験がある。

石原 純先生(インペリアル大学)

専門は様々な病気を引き起こす免疫細胞の研究が専門。免疫工学を用いてがん免疫療法の新しいアプローチし、関節リウマチや多発性硬化症などの自己免疫疾患の治療法も考案。以前は東京女子医大での研究経験があり現在国立がんセン

ターとの共同研究に従事。スイス、アメリカでのポスドク経験がある。研究だけでなく起業にも勢力的に取り組んでおり現在4つの会社を運営している。

飯田史也先生(ケンブリッジ大学)

ケンブリッジ大学工学部ロボティクス学科教授。研究領域は、生物学的なロボット工学。人間の運動と操作のバイオメカニクス、自律型ロボットのナビゲーション、人間と機械の相互作用に関連する多くの研究プロジェクトに携わる。過去にスイス、ドイツ、アメリカでポスドク研究の経験がある。



サバイバルセミナーの様子

(2) パネルディスカッション 概要

〇サバイブしている中で感じた真の友人の大切さ

(鳥井)100人の知り合いより1人の真の友達(マブダチ)。関係性の濃い人がいると長く色々付き合えるし、無茶も言えるし言ってもらえる。そういった関係性の人がいるとキャリアの形成にもすごく役に立ったと振り返って思う。

(飯田)尊敬すべき人との出会いがなかったら今の自分がないなと思える。指導教官も私の心の支えであったし、小規模の学会で偶然出会えた人との関係性がずっと続いている。人との交流がサイエンスのキャリアを続ける上で大事だと思う。著名な論文を出したとか、大きなグラントを獲得したとかもちろんサバイブするには必要であるけれど一方で人との関係はずっと続くものでそれが一番大事。

第6回 JBUK英国サバイバルセミナー

〇イギリスで研究を続けることのメリットとデメリットについて。言語の壁など

(飯田)メリット10% デメリット90%の感じ。あえて言えば、日本でいたら気づかないことに気づけた。それを感じるために90%を犠牲にして得ている。日本にいと日本人らしくしないといけない。

言葉は永遠のテーマ、毎日新しい単語に出くわす。非英語圏にいても仕事は英語だった。特にケンブリッジにいと普段聞き鳴れない言い回しに翻弄されることがある一方でそれを逆手に取ってある意味、図太さを持ちつつ生き抜いている。

(梅村)子供を持つ母親として授業のスケジュールなどがフレキシブルに調整できる職場環境はメリットであると感じる。一方で日本に特化した研究ではなくもっと広いアジア圏全体の分野の研究や授業内容を求められたことは想定外だった。

(石原)ロンドンそもそも外国人が多くあるという特殊な環境。授業中にネイティブの学生に自分の英語の指摘をされたことはあるがそれを恥だとは思わなかった。言語でネイティブに勝とうとするのは得策ではなくそれをうまく返して対応し言語を使わない部分で自分の強みを生かし活躍できる道を模索すると良いのでは。



サバイバルのための様々な質問が出た

〇イギリスの大学の環境について思うことは？率直な意見を聞きたい。

学生一人をコミットすることでお金の面で損することは目に見えてお金を得るために海外からの学生をどのように取り込むかなど考えているように思える。研究費などに関してはまた別で難しい。

(梅村)ビジネススクールの場合高い点数の論文をどれだけたくさん出しているかによってほぼ評価が決まる。それとア

イデンティティを持つことがいいと思う。それがないと大学側は評価がしにくい。英大学はアメリカと異なり解雇されにくい一方で、上の役職に上がるのがとても大変になってくる。イギリスはコロナの期間でも給料がアメリカのようにフリーズすることがなかったのはありがたかった。

〇イギリスの大学で独立するためのコツ、大学の採用方法なども知りたい。

(鳥井)大学のコラボレーションをとることが大事。コネクションも大事。10人くらいしか最後に辿り着かない。最後に辿り着く人は居場所を見つけているがそこに居続けたいかどうか考えた方がいい。論文に正解はない。時と場合による。大学側がどのような分野を欲しているか運次第のこともあり、やや雑な選考になる場合もあることは否めない。中の人と仲良くなって聞き出すこともできるがいつも現実的とはいえない。一人強力なサポーターを持っているとその人が他のメンバーに自分を推してくれるケースもあった。

(石原)日本人としての強みを活かすのが大事。実験が上手いとか。勤勉であるとか。意外と地道な働きを見て評価されている人がいるからそれをいい感じにアピールしていくのも良い。ある特定分野で絶対に負けない強みを持つことは重要。私の場合は、研究とは別にバーを経営していること、マジックが上手いといった趣味の話題を提供し、学会で多くの人に覚えてもらったことも良かった。とにかく自分のサイエンスを磨くことに集中する。世界共通言語は英語というけれど笑顔と情熱とサイエンスで繋がっていると思えばいい。

〇研究費の獲得のコツなどあれば教えてほしい。

(石原)クラウドファンディングを立ち上げて資金援助を求めたことがある。責任を感じる状況下で真剣に何を貢献できるかを考える機会となった。

(飯田)成功に至るまで難しいことが多くが、他の人があまりしなかったことをあえて狙う。不採択が続いた時の自分自身のアンガーマネジメントのスキルも磨きつつかに心折れないようにしぶとく生きぬけるかが重要になってくる。

〇学内でセミナーを開きたい場合どのように話を大学に話を持っていけばよいのか。

(鳥井)どの分野もどの大学でも先にセミナーを開催した人がいるので直接メールを出して機会を探ってみることをお勧めする。半分くらいの割合で受け入れてもらえる。若い頃によくワークショップを開いてコネクション作りをしたのは良い経験。自分で講演者を招聘するという手もある。

第6回 JBUK英国サバイバルセミナー



セミナー終了後のレセプションでネットワーキング

○(採用情報と関係して)各大学でどの分野の人材が足りていないか知るすべはあるのか。

(鳥井)例えば今最近の流行りのAIの分野やその大学の強みのある分野の研究者の数が減っていると、誰かが定年退職でそのポストが空かないか、女性が足りているのかという視点でサーチしてみることができると思う。大学側は採用する際にこの人材がどれくらい研究資金を持ってこられるか、どれ

くらい大学側にとってメリットがあるのかも重視する。

○その他英国でサバイブしていくための心構えなど。

(飯田)飲み会などがあるがネイティブ同志の会話では何を話しているか正直わからなくて辛い時もあるがなるべく居座ることが大事。世間話をしつつ交流を持つことが重要。そのためにも話題の引き出しをたくさん持っておくと良い。周りの人の雰囲気についていけなかったときはとりあえず天気の話をする。

研究者の人生は無限ゲームだと思う。将棋やチェスなどは勝つことが大事。だけど無限ゲームはその場に居続けて退場しないことが大事。どれだけ負けずにしぶとく続けるか、短期間で結果が出るとは限らないため、どれだけ長期で見据えるかが重要だと思う。

(JSPS London 副センター長 妙見由美子)

(参加者全員での集合写真)



「在英日本人研究者ネットワーク(JBUK)の紹介」

JSPSロンドン・国際協力員・宮浦由衣

研究と研究者の国際化が進んだ現在では、多くの日本人研究者がイギリスで活躍しています。JSPSロンドンでは、このような在英日本人研究者を日英研究交流の柱となる存在と考え、彼らのネットワークを活かし、研究活動をサポートするとともに、イギリス内外における在英日本人研究者のプレゼンスを高めていくための活動を行っています。

在英日本人研究者ネットワーク(通称JBUK; Japanese Researcher's Network Based in the UK)とは、2006年に設立したネットワークで、イギリスの大学や研究機関で活動している様々な専門分野の日本人研究者約526人のメンバー(2024年9月現在)を擁しています。

JSPS Londonは、JBUKに情報・交流の機会を提供しています。例えば、巻頭特集のように今年是在英日本人研究会の一環として「サバイバルセミナー」を開催しました。英国で研究者として活躍するための貴重なアドバイスが聞け、又意見交換も活発で、我々が提供するいつも好評な日本食とともにネットワーキングが行われていました。久しぶりに日本語で会話したという人もいっしょに皆さんご満足されておりました。また海外特別研究員向けのPre-departure Seminarの後に開催されるネットワーキングイベントへご参加いただき、これから日本に向かうFellowの方々とも交流されておりました。



2024年4月開催Pre-departure Seminarの様子

また、JBUKに入会すると、次のページに紹介するSymposium & Seminarスキームに応募できます。詳しくはこの後の体験談をご覧ください。更に、JSPS Londonの季刊誌である本誌「JSPS London ニュースレター」では、随時、在英日本人研究者会(JBUK)メンバーによる英国での研究生活や体験を綴ったエッセイ「在英研究者の者窓から」を掲載しています。我こそ是非記事を書きたいというJBUKがいっしょにいましたら是非、lon-info@overseas.jps.go.jpへご連絡ください！

最後にJBUKから派生した英国在住の日本人研究者の会・アカデミックサロンをご紹介します。在英日本人研究者からは、もっと他の研究者とつながりたい、研究の話を知りたいという希望があり、JBUKの有志が作った会です。アカデミックサロンは年に2~3回、定例会が開催されており、今年は2024年5月20日にUCLの講義室において第16回アカデミックサロン定例会が開催され、(ハイブリッド)私も参加いたしました。各ご講演は大変面白く勉強になりましたし、あらゆる研究分野の参加者との学際的な議論がなされる素晴らしいサロンだと感じました。定例会の後はネットワーキングの機会も設けられており、和気あいあいとした雰囲気でお話ができることができました。こちらからご登録いただけますので、ご興味のある方はぜひご登録されてください。

<https://www.c-sqr.net/invite/PdJiDkIVTeTijBTBAA>

(アカデミックサロンの詳細はNewsletter 65号で)



第16回 アカデミックサロン 定例会の様子

その他、各JSPS海外研究連絡センターでは、以下のような日本人研究者向けイベントを実施しております。

○JSPSストックホルムセンター

<https://www.jps-sto.com/event/20240216/>

○JSPSストラスブルグセンター

○JSPSボンセンター

<https://www.jps-bonn.de/ja/events/researchers-network/202309>

○JSPSサンフランシスコセンター

https://www.jpsusa-sf.org/community_j.html

○JSPS北京センター

<https://www.jps.org.cn/jpsbj/site/rbrjp/rbrmljp.htm>

在英日本人研究者ネットワーク(JBUK)に入りませんか？

JSPS(日本学術振興会)ロンドン研究連絡センターでは、在英日本人研究者のネットワーク作りと研究活動支援を行っています。



JBUK(在英日本人研究者会)は2006年から始まった「在英の日本人研究者の緩やかなネットワーク」で、約526人のメンバーがいます(2024年9月現在)。

メンバーは、イギリスで研究しているPhDの学生やポスドク、サバティカル中の研究者、イギリスの大学のLecturerやProfessorまで、様々なキャリアの、多様な専門分野の日本人研究者です。

メンバーの特典

- ① JSPSロンドンからイベント情報等、様々な情報をメールでご案内します。
- ② メンバー間でのご自身の情報開示にご同意いただける場合には、他のメンバーの情報を閲覧できます。専門分野が近いメンバーを探すことができます。
- ③ メンバー限定のイベントにご招待します。
- ④ メンバーを対象とした助成プログラムがあります。

JBUKメンバーの体験談:「在英研究者の者窓から」:

<https://www.jps.org/jbuk/window.html>

入会は簡単！
JSPSロンドンのWebsiteから登録するだけ！

ここをクリック: <https://www.jps.org/jbuk/>



日本学術振興会ロンドン研究連絡センター
14 Stephenson Way, London, NW1 2HD, UK
Tel: +44 (0)20 7255 4660 Fax: +44 (0)20 7255 4669
E-mail : lon-info@overseas.jps.go.jp
Web site: <http://www.jps.org>

「The JSPS Alumni Association of the UK and the Republic of Ireland」

by International Programme Coordinator, Polly Watson

Exploring the Activities of the Alumni Association under the Auspices of JSPS London

The JSPS Alumni Association of the UK was first established in 2003 by researchers who returned to the UK having been funded by a JSPS International Fellowship Programme while in Japan (former Fellows). In 2014 inclusion of former JSPS fellows based in the Republic of Ireland was ratified by JSPS Tokyo head office and subsequently the name of the association changed to The JSPS Alumni Association of the UK and the Republic of Ireland. This Alumni Association is continuously increasing in size to currently 930 active members from a broad range of research fields across the natural and physical sciences and the humanities and social sciences.

There are now two categories of membership; all those who have been supported by a JSPS International Programme are eligible to apply for regular membership. Persons who have a distinguished record of promoting scientific exchange between Japan and the UK are eligible to apply for honorary membership. Membership is also evenly spaced across all career stages from early career researchers to established and tenured mid-career and professorial level researchers that have long and successful track records of research collaboration with Japan. With the help of six Executive Committee members and three Regional Managers, the Alumni Association carries out a number of activities throughout the UK and the Republic of Ireland with numerous

benefits for members including academic events and networking opportunities to strengthen regional groups and their connections with Japan.



Valuable experience in Japan to share with new Fellows at the pre-departure Seminar

There are Pre Departure Seminars held throughout the year that the Alumni Association helps to organise to prepare and give guidance to new fellows for their research experience in Japan. After these events there is a networking evening for Alumni members to network, exchange information and share experiences in an informal, relaxed atmosphere with these newly selected fellow.

There are also presentation days for alumni members to speak about their experiences as a fellow and encourage others to apply for JSPS funding programmes.

Additional benefits also include two funding schemes available exclusively for Alumni members that are held annually. The first is the JSPS London **Symposium and Seminar Scheme** for alumni to organize large and small scale academic events in cooperation with JSPS London at their respective universities and with counterpart funding agencies, to showcase the results of research collaboration with their Japanese partners. The second is the **BRIDGE Fellowship** launched in 2009, which is a travel bursary that funds up to a 30 day visit to Japan to enable alumni members to maintain and strengthen or create new collaborative links with the Japanese academic community.

At important milestones in the history of the Alumni Association, the most recent being on 4th September 2024 as the 20th Anniversary since the Alumni Association's establishment, awards are made to Alumni members. These awardees are decided by the Alumni Association Executive Committee and Regional Managers based on their outstanding academic achievements and contributions towards Japan-UK collaboration since being a recipient of either of the Alumni funding schemes mentioned. Achievements considered include follow-on grants obtained, high impact joint publications and future larger scale events that were organised with expanded collaborative networks and researcher exchanges.

For enquiries about this alumni association, please e-mail:

lon-alumni@overseas.jsps.go.jp



20th Anniversary of JSPS Alumni Association at the Ashmolean Museum



Alumni Awardees at the ceremony

Other information:

Fellow's Experiences: https://www.jsps.org/funding_case_studies/

Voice!: https://www.jsps.org/alumni_about/voice.html

Introduction of Bridge Alumni Members

The Bridge Fellowship Programme is only open to members of the **Alumni Association!**

Bridge Fellowship

The BRIDGE Fellowship Program is available exclusively to regular members of officially recognized JSPS alumni associations who have previously carried out research in Japan through the Postdoctoral Fellowships for Foreign Researchers or other JSPS initiatives. This program offers participants the chance to establish, maintain, and/or enhance collaborative research relationships with Japanese counterparts. The goal is to foster robust networks between researchers in Japan and abroad through various activities.

The latest information about Bridge Fellowship :

Field of research	All fields of the humanities, social sciences and natural sciences.
Duration	14 to 30 days
Application deadline	15th December 2024
Visiting start period	01 JULY 2025 to March 2026
Terms of award	<ul style="list-style-type: none"> • Round-trip ticket • Overseas travel insurance • Daily maintenance allowance of ¥13,000 • Research support allowance of up to ¥100,000
Number of Awardee	50 per year (plus an additional 7 for the UK)
Success rate :	London: 38%(FY2024)
Eligibility	<ul style="list-style-type: none"> • Be a researcher who has research experience in Japan under a JSPS Programme and who is currently a regular member of an officially recognized JSPS Alumni association • Be a researcher who is employed as an active researcher working at the university or research institute. • The host researcher must agree to accept the Fellow.



If you belong to another alumni association, such as the USA, Germany, France or Sweden, please apply through your own association (The deadline may vary)

Introduction of Symposium and Seminar Scheme for JBUK and Alumni Members

Only available at JSPS London, this is a great opportunity for those who belong to **JBUK** or the **Alumni Association**

Symposium and Seminar Scheme

JSPS London has established a funding scheme to support events organized by members of the JSPS London Alumni Association or for JBUK at the institutional or departmental level. These events should aim to foster high-quality collaboration in cutting-edge fields or showcase research in areas where Japan, the UK, or Ireland are world leaders. The events can take the form of a symposium (for over 50 participants) or a smaller-scale seminar (for up to 50 participants). Both types of events can either focus on UK-Japan or Ireland-Japan bilateral collaboration or be part of an international conference that seeks to develop trusted multilateral partnerships with Japan, the UK, and/or Ireland at the centre.

The latest information about Symposium and Seminar Scheme :

Field of research	All fields of the humanities, social sciences and natural sciences.
Duration	14 to 30 days
Application deadline	10th February 2025
Visitig start period	01 JULY 2025 to March 2026
Duration for Event	1 to 3 days for Symposium / up to 1 dy for a seminar
Terms of award	<ul style="list-style-type: none"> •An international air ticket, accomodation and daily allowance for speakers from Japan (up to 3 people) •Funding towards the venue, catering , advertisement , material printing and costs of publication arising from the event based on the condition below: ** For the seminar : up to £1,000 **For the bilateral symposium: up to £1,500 **For the multilateral symposium: up to £2,000
Number of Awardee	2 to 3
Success rate :	London: 44 %(FY2024)
Eligibility	<ul style="list-style-type: none"> •Be a researcher who has research experience in Japan under a JSPS Programme and who is currently a regular member of an officially recognized JSPS Alumni association or the member of the the JSPS London Network for Japanese Researchers Based in the UK (JBUK) •Be a researcher who is employed as an active reseracher working at the university or research institute. •The host reseracher must agree to accept the Fellow.

Don't miss it!
It is the latest call !!

在英研究者の者窓から

第34回 Associate Professor, University College Dublin 小舘 尚文



Newman House (Museum of Literature Ireland) での著書“Systems Thinking for Global Health”出版記念セミナー前の記念撮影。共編者(Vallières氏・Mannan氏)とともに(筆者、左端)。

略歴

東京大学より学士(教養学部第三(国際関係論))および法学修士、ロンドン大学経済政治学院(LSE)よりMSc(European Politics and Policy)、PhD(Political Science)取得。DAAD 研究員(ポツダム大学)、NIHR King's Patient Safety and Service Quality Research Centre で研究員をした後、2012年~アイルランド国立大学ダブリン校(UCD)社会科学・法学部専任講師、2019年~准教授。専門は、比較医療政策・科学技術医療社会論。現在、UCD社会政策・社会福祉・社会正義学科で公共政策大学院(MPP)プログラム長。北海道大学公共政策研究センター、東京大学未来ビジョン研究センター、フランス社会科学高等研究院(EHESS)のシニア研究員や招聘教授を兼務し、2024年6月~日本生活支援工学会理事、11月~千葉大学フロンティア医工学センターの特別研究教授に就任。<https://people.ucd.ie/naonori.kodate>

アイルランド高等教育の現状や自身の研究活動及びJSPS London Symposium & Seminar Scheme に採択された際のことや、その後について述べていただいている。

ロンドン大学経済政治学院(LSE)とキングス・カレッジ・ロンドン(KCL)があるストランドで8年近くを過ごしてから、2012年にパーマネントポストを得たのが、アイルランド国立大学ダブリン校だった。それから12年間、1サイクルが経過したことになる。このたび、「在英研究者の者窓から」の執筆という大変貴重な機会を頂いたので、これまでを少し振り返ってみたい。

【アイルランドおよびアイルランド国立大学ダブリン校(UCD)について】

以前は、アイスランドと混同されることもあったアイルランド(漢字では「愛蘭土」)なので、略称は「愛」)だが、2016年にイギリスのEU離脱の是非を問う国民投票があり、北アイルランドとアイルランド共和国との間の目に見えない「国境」問題などが顕在化したことで、認知度も高い国となった。アイルランドは、北西ヨーロッパにあり、人口約500万人の共和国である。雪が降ることも、気温が30度を超えるようなこともなく、1年間を通じて穏やかな気候であるが、広さや人口のスケール感は北海道を想像してもらえるとよいだろう。

アイルランドの首都ダブリンには、アメリカ系のビクトック、GAFA(グーグル、アップル、旧フェイスブック(現メタ)、アマゾン)の研究開発拠点があるほか、ファイザーをはじめ、ドイツのメルク、スイスのノバルティス、そして、日本のタケダやアステラスといった大手製薬会社の多くが製造拠点をアイルランドに置いている。航空機リース業界の世界的拠点にもなっている。

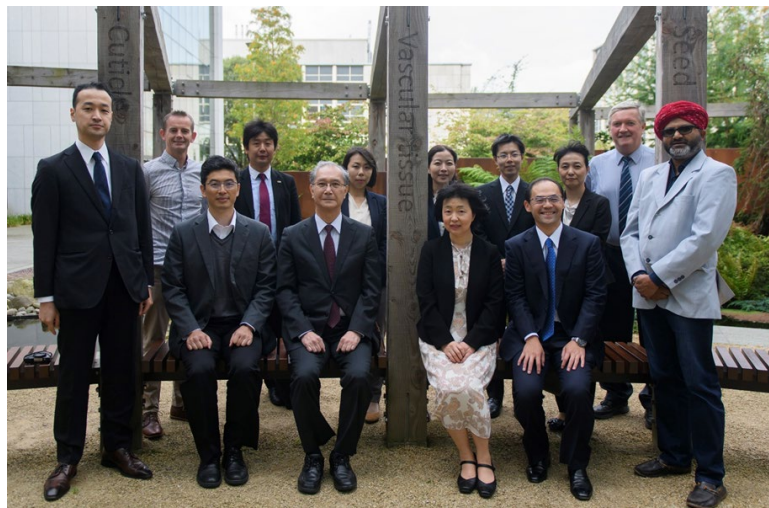
そして、私が勤務するアイルランド国立大学ダブリン校(UCD)は、アイルランド・カトリック大学として、1854年にJohn Henry Newman枢機卿によって創立され、今年ちょうど170周年を迎える。卒業生の中には、文豪 James Joyceやイギリスで活躍するコメディアン、Dara Ó Briain(数学・理論物理卒)、Brian O'Driscoll(ラグビー選手)などがある。若者人口が増えるアイルランドでは、ここ数年、高専が技術科学大学に再編されて、大学の数も増えているものの、UCDは附属病院も複数もち、依然として最大規模の総合大学で、ダブリン郊外にあるキャンパスも広大である。

UCDに着任した12年前を思い起こすと、当時はまだ文学、歴史、ダンス、ケルト音楽、映画といった関心から訪問を決めた、という日本人に出会うことがほとんどだったが、いまでは、医学部、理学部、経営学部に入學してくる学部学生も珍しくなくなっている。また、日系アメリカ人や「高校から海外で」といってUCDにやってくる学生もいる。まさに、十(二)年一昔、である。

【研究活動:JSPS Londonセミナーほか】

イギリスの大学院での留学と研究所での勤務経験があった私にとって、JSPS Londonは遠い存在ではなかったが、UCDに移って、はじめて助成金を頂いたのが、今から5年前の2019年であった。私は、近年、主に介護ロボットや福祉支援テクノロジーの社会実装に関する研究を行っており、2019年~22年ま

在英研究者の者窓から



2019年9月6日JSPS Londonセミナー後、UCD理学部（UCD Evolution Garden）にて。筆者は前列、右から2人目。

左から:安東正隆(JSPS London(当時)副所長)、Brian Caulfield(UCD教授)、俞文偉(千葉大学教授)、渡邊聰(在アイルランド日本大使館(当時)一等書記官)、上野信雄(JSPS London(当時)所長)、横山美季(JSPS London(当時))、湯本晶代(千葉大学)、諏訪さゆり(千葉大学教授)、池田幸平((当時)東京大学工学部4年/UCD小館研究室インターン)、小館尚文(筆者)、島村敦子(東邦大学)、Diarmuid O'Shea(セント・ヴィンセント大学病院上級医師/アイルランド王立内科医協会(RCPI)現会長)、Hasheem Mannan(UCD)。敬称略。

での3年間は、公益財団法人トヨタ財団「先端技術と共創する新たな人間社会」から研究助成を頂いて、プロジェクト『介護ロボットの社会実装モデルに関する国際共同研究: 人・ロボット共創型医療・介護包括システムの構築に向けて(Harmonisation towards the establishment of Person-centred, Robotics-aided Care System、略称:HarP:RoCS)』の研究責任者を務めていた。これは、アイルランド、日本、フランス、香港の医工学・介護・看護・社会科学分野の研究者や実務家をつなぐ学際的大規模プロジェクトであったが、世界中がコロナ禍に襲われて、移動の自由がきかなくなる中でもなんとか成果をあげることができた。そして、幸運にも、同じく2019年には、JSPS Londonのセミナースキームに採択頂き、“Technology-supported Community Care in Japan and Ireland”と題したセミナーをUCDのベルフィールドキャンパスと、アイルランド南東部の海岸町トラモアにて、2回ほど開催することができた。トラモアは、『怪談』や『知られぬ日本の面影』で知られるギリシャ生まれ、ダブリン育ちの小泉八雲(Patrick Lafcadio Hearn)と縁があるため、松江市(島根県)、焼津市(静岡県)、富山大学とも接点があり、日愛間交流にふさわしく、日本からの研究者や学生をお招きしたいと夢見ていた。

住み慣れた地域や自宅で、できる限り、長い間、健康で、快適に暮らしたいというエイジング・イン・プレイス(Ageing in Place)を実現するためには、まだ医療・介護システムの改良や確立が必要であるが、そのなかで、テクノロジーへの期待は大きい。超高齢化社会といわれる日本で地域包括ケアシステムを支えるロボットを含むテクノロジーの開発が進んでいるのは周知の通りであるが、アイルランドのような比較的「若い」国で

も、認知症ケア、高齢者や障がい者の社会的疎外、転倒防止へのテクノロジー活用に関する研究が進められている。JSPS Londonから助成頂いたセミナーによって、こうした日愛の取り組みや共通の課題などを共有することができた。

お陰様で前述のHarP:RoCSプロジェクト終了後も、フランス政府の研究資金や(株)トヨタ自動車・トヨタ未来創生センターとの共同研究の依頼を受け、研究活動は順調に広がってきている。セミナー開催をご援助下さったJSPS Londonのチームの皆さまにこの場を借りて感謝する。

【日愛間学術・研究交流のサポート及び基盤づくり】

研究・教育の傍ら、着任当初から、個人的なネットワークも総動員しながら地道に進めてきたことがある。それが、日本の大学や研究機関との「繋ぎ」、いわゆる、学内のインフラ整備である。UCDには、日本人教員が片手で数えるほどもおらず、日本語を学びたい学生がかなりいるにも拘らず、学部・学科内で日本のことやアジアのことを学べる場がほぼ皆無である。そこで、日本文化サークルの学生や日本人の博士課程の学生たち、さらには、日本の研究機関や大学と共同研究をしている理工系分野の先生たちに働きかけて、UCD Japanなるグループを2016年に結成した。このユニットを母体として、数多くの公開セミナーや学生・研究者サポートを行い、その実績をもとに2020年4月には、UCD日本研究センターの設置に成功した。センター長は私が、副研究所長は、Emma Sokell氏(現:物理学部学科長、2025年1月より大学院責任者・教務担当副学長)に就任予定)が務めている。Sokell氏は、現在も電気通信大学の研究者と共同研究をしており、JSPS Alumni Association of the UK and ROI (Republic of Ireland)のメンバーで、JSPS Londonとはご縁がある。

在英研究者の者窓から

研究センターの認可は下りたものも、予算も専属スタッフもなく、(外部)資金はすべて自らの活動によって生み出さなくてはならない。しかし、チームの熱い想いとボランティア精神にも救われて、多方面で成果を生み始めている。その1つの例として、パートナー大学の北海道大学と本学で共同申請した、エラスムス・ムンドゥス(Erasmus + International Credit Mobility) プログラムに2度、採択されたことが挙げられよう。センターのメンバーである人獣共通感染症研究者Stephen Gordon氏と私がタイアップすることで、学際的な「ワンヘルス(One Health)」をテーマにすえたことが、激しい競争の中での採択の鍵だった。

そして、リソース不足は、日本の各大学(立教大学や駒澤大学ほか)から在外研究でいらして下さる先生方や欧米諸国の研究者の力を借りて補い、歴代の駐アイルランド日本大使(渥美千尋氏、三好真理氏、北野充氏、丸山則夫氏)や大使館スタッフにもお力添えを頂いてきた。とりわけ、元駐日アイルランド大使、John Neary氏には、私の学科の特任教授にご就任頂き、協働作業をさせて頂いてきた。今年6月に刊行されたばかりのNeary氏の単著Public Diplomacy in Ireland and Japan (Amsterdam University Press)には、日愛両国の間をつなぐ草の根交流を支えてきた人たちや活動が数多く記されているが、センターの軌跡と重なって成果の積み上げを実感している。

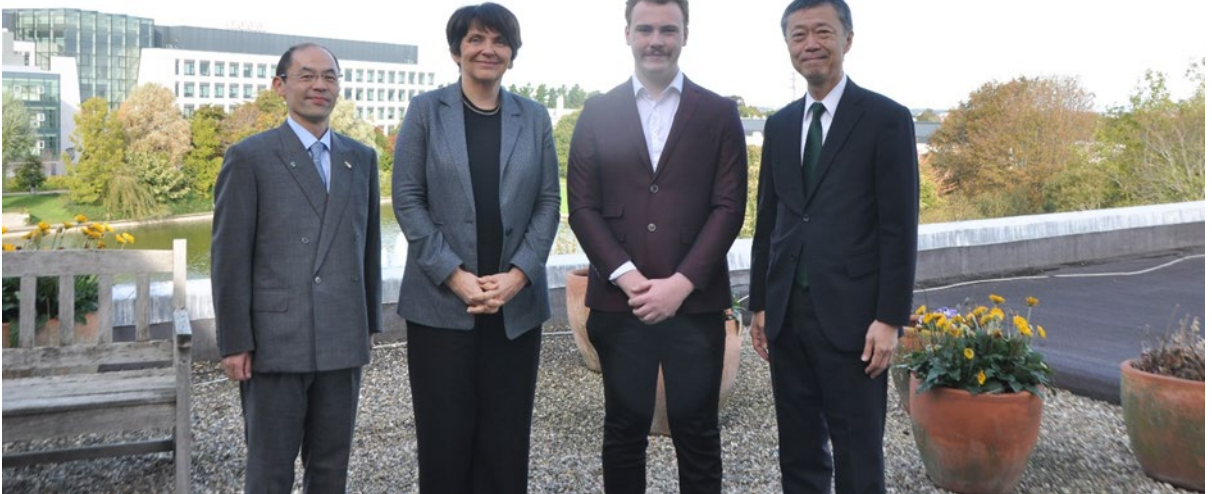
もちろん、こうしたインフラ整備で最も大切にしたいのは、学生や(若手)研究者同士の交流、そして、未来志向の学術・研究の発展である。その意味で、アイルランドの大学生代表として、外務省の対日理解促進交流「MIRAI」プログラムへの参加者をこれまでに3名送り出すことができたことやスタンフォード大学に奨学生(博士課程)を進学させることができたことはチームとしても誇れる実績だ。この原稿の執筆を通じて、改めて、コメンターからの惜しみないサポートや周囲の方々からの有形無形の温かいご支援に対する深い感謝の気持ちも新たにしている。引き続き、JSPS Londonや各方面で活躍される皆さまからのご指導とサポートを賜りたく、ここにお願ひする次第である。

*UCD日本研究センターについては、ウェブサイトを参照されたい。

<https://www.ucd.ie/japan/newsevents/>

Dr Naonori Kodate

Associate Professor in Social Policy & Social Robotics
UCD School of Social Policy, Social Work and Social Justice
University College Dublin, National University of Ireland



2023年10月16日UCD学長室外のベランダにて。新学長就任後、日本大使との初面談後、記念撮影。
左から:小館尚文(筆者)、Orla Feely (UCD学長)、Ciarán Micheál Maher (外務省MIRAIプログラム奨学生、UCD環境生物学学科2年)、丸山則夫(在アイルランド日本大使)。敬称略。

Voice! from Alumni member

Vol.33 Dr Goran Vladislavljević

Voice! from Alumni member

Dr Vladislavljević graduated from the Department of Food Technology and Biochemistry of the University of Belgrade in 1987 as the highest-ranked student in his cohort. He obtained his MSc degree (in 1992) and PhD degree (in 1997) from the University of Belgrade, Serbia where he served as an Associate Professor and Visiting Professor. He became Lecturer in Chemical engineering at Loughborough University in 2006 and was promoted to Senior Lecturer in 2010. He holds a Scientific Advisor position at the Vinča Institute of Nuclear Sciences in Belgrade. He was awarded a Research Humboldt Fellowship (in 2002-2003), JSPS Postdoctoral Fellowship (in 2002-2003), Royal Society Fellowship (in 2004), Fulbright Fellowship (in 2005), JSPS Invitation Fellowship (in 2006), JSPS Bridge Fellowships (in 2014 and 2023), and International Excellence Fellowship from Karlsruhe Institute of Technology (in 2021 and 2023). His research was also supported by Engineering and Physical Sciences Research Council (EPSRC), Innovate UK, and numerous industrial partners. Dr Vladislavljević has been listed among the top 2% scientists globally by Stanford University and has been named an inaugural ScholarGPS Highly Ranked Scholar in microfluidics. His research is focused on droplet microfluidics, membrane technology, soft matter, and colloid and interface science.



Picture 1: Watching sumo wrestling in Kokugikan Arena during the orientation JSPS meeting.

Dr Goran Vladislavljević of Loughborough University, who has been awarded JSPS Fellowship and Bridge Fellowship on several occasions.

I first visited Japan in 2001 as a special guest speaker on the 36th SPG Forum in Miyazaki, invited by Dr Tadao Nakashima, the Director of Miyazaki Prefectural Industrial Technology Center (MITC). The forum brought together Japanese academic and industrial experts to discuss various applications of microporous membrane produced from Shirasu Porous Glass (SPG) in healthcare fields. "Shirasu" is a type of soil containing volcanic ash that can be found in southern Kyushu. Together with his co-workers Masataka Shimizu and Masato Kukizaki, Dr Nakashima invented the technology for production of porous glass membrane using Shirasu as a source of silica and alumina and used this membrane for preparation of high-quality emulsions. At that time, I worked as a Humboldt research fellow in Prof. Helmar Schubert's lab at Karlsruhe Institute of Technology and used SPG membranes manufactured in Japan to prepare food emulsions by crossflow membrane emulsification. After my plenary talk, I was encouraged by Dr Nakashima to apply for a JSPS fellowship to work on further development of SPG membrane emulsification technology. Following a smooth application process, I was awarded a postdoctoral JSPS fellowship and spent one year (2002/03) working at MITC situated along the Pacific coast in southeast Kyushu. During research work in Miyazaki, I have developed "premix SPG membrane emulsification" and used this emulsification process to produce multiple emulsions with narrow particle size distribution and high encapsulation yield. The technology was applied in Miyazaki hospital to achieve a controlled release of the anti-cancer drug irinotecan hydrochloride

(CPT-11) and minimize its side effects.

Although my wife and sons could not join me for the entire duration of my fellowship, my hosts and Mrs Shino, an English-speaking local volunteer make me feel at home. They helped me to rent a suitable apartment near the institute's building and explore Miyazaki's rich cultural heritage and its stunning coastal area.



Picture 2: After signing the collaboration agreement at the beginning of my JSPS postdoctoral Fellowship (from left to right): Dr Tadao Nakashima, the director of MITC, Mr Chuman, the Director-General of Commerce, Industry, and Tourism in Miyazaki Prefectural Government Office and Dr Goran Vladislavljevic.

Some highlights of my postdoctoral JSPS Fellowship include reception by the mayor of Sadowara, Mr. Tadashi Tojiki in his office in Sadowara town hall both at the beginning and the end of my stay, signing a collaboration agreement with the Director-General of Commerce, Industry, and Tourism Department in Miyazaki Prefectural Government Office, which was reported in a local newspaper (Picture 1), and attending the orientation programme for newly arriving JSPS fellows. The orientation programme was a great opportunity to meet many JSPS fellows from all over the world and take part in exciting social events including watching sumo wrestling in Kokugikan Arena (Picture 1) and visiting the ancient town of Kamakura.

After finishing my JSPS postdoctoral fellowship, I have used the acquired research experience in membrane emulsification to investigate spinning membrane emulsification in collaboration with Professor Richard Williams at Leeds University (supported by a Royal Society fellowship) and to prepare emulsions containing droplets coated with nano-laminated biopolymer layers in collaboration with Prof. Julian McClements at the University of Massachusetts (supported by a Fulbright fellowship).

In 2006, I was awarded an Invitation JSPS Fellowship to work in National Food Research Institute (NFRI) in Tsukuba with Prof. Mitsutoshi Nakajima, the inventor of silicon microchannel array devices for monodispersed droplet generation and the pioneer of step microfluidic emulsification. I previously met Prof. Nakajima several times at various conferences and research stays and visited his lab during my postdoctoral JSPS fellowship, which turned out to be crucial in preparing a high-quality application for the fellowship with well-planned research activities. Tsukuba is a vibrant science city which offers excellent accommodation facilities in international quest houses, so it was easy to find excellent accommodation in a guest house near the NFRI building and to be fully focused on the research work. My project involved investigation of microdroplet generation using microchannel plates with numerous straight-through microchannels fabricated on a single-crystal silicon plate by photolithography and deep reactive ion etching. This JSPS fellowship allowed me to acquire experimental skills in step microfluidic emulsification, a superior microfluidic technology for scaled-up production of monodispersed droplets and particles.

In 2014, I used a Bridge JSPS-UK fellowship to carry out a proof-of-concept study using novel grooved-type silicon microchannel plates in collaboration with Prof. Mitsutoshi Nakajima and Dr Isao Kobayashi at NFRI Tsukuba. The experiments confirmed that grooved-type terraced microchannels can be used for a long-term stable production of monodispersed microparticles made of

synthetic biodegradable polymers. After this fellowship, I purchased microchannel emulsification devices from EPT-Tech Hitachi to produce drug-loaded biodegradable micro-reservoirs for delivering the antiproliferative drug sirolimus in a drug-eluting balloon. The balloon was commercialised by one of the world-leading biomedical companies and used to open blocked coronary arteries and improve blood flow to the heart.

Finally, in 2023 I was awarded another Bridge JSPS fellowship to refresh my contacts with colleagues from Tsukuba University, NFRI and Tokyo City University. It was a great opportunity to meet Prof. Andrew Utada, with whom I worked together on capillary microfluidics at Harvard University and to discuss with him my recently developed LEGO-inspired droplet microfluidic devices. I had plenty of opportunities to network with Japanese colleagues and visiting scholars (Picture 3), especially through participation in conferences and seminar programs, which I find as one of the most appealing aspects of Bridge JSPS fellowships.

JSPS fellowships have defined my research identity and helped me to become a better scientist. I have published 12 peer-reviewed journal articles in collaboration with Japanese colleagues that have been cited more than 1000 times. The expertise from JSPS fellowships was crucial for my appointment at Loughborough University and shaped the research profile of my research group, which is focused on the development of innovative droplet microfluidic and membrane emulsification devices and their implementation in diverse fields, from thermal energy storage and carbon capture to tissue engineering and biomedical diagnostics.

I can strongly recommend JSPS fellowships to young scientists who want to succeed and become scientific leaders in their respective fields.



Picture 3: Discussion of the busy schedule during my Bridge JSPS fellowship at Tsukuba University in September 2023 (from left to right): Prof. Markos Neves (my host), Prof. Bhesh Bhandari (a visiting scholar from The University of Queensland), Dr Goran Vladislavljevic, Prof. Mitsutoshi Nakajima (a host for my invitation JSPS fellowship) and Dr Isao Kobayashi (a collaborator on many research papers).

| 英国の機関紹介

Knowledge Quarter London

今回は機関紹介ではなく、少し違う視点から紹介したいものがある。なのでまずは機関でないことを先に謝っておく。申し訳ない。次回に期待！

皆さんはKnowledge Quarterをご存じでしょうか？

Knowledge Quarter Londonとはカムデン・カウンシル、イスリングトン・カウンセル、Wellcome Trust, British Library, British Museumなどが役員となり、キングスクロスから半径1マイル内を拠点として100以上の団体で構成されている。まさに学術研究機関、スタートアップ企業、そしてクリエイティブ産業が集積するイノベーション拠点である。このような多様な分野が連携し、知識の創造と社会への還元に取り組んでいるのである。学術、文化、ビジネスが融合し、コラボレーションの機会、世界的なイノベーション拠点といえる。ちなみに弊センターもKQLの会員資格の条件となるキングスクロスから半径1マイル内に位置している。KQLは、2014年12月に大英図書館とUniversity of the Arts LondonのカレッジであるCentral Saint Martinsによって設立された。しかし、その学術的な背景は18世紀にまでさかのぼる。この地域は常に学問、芸術、文化が栄えてきた歴史あるBloomsburyである、その設立は決して偶然ではない。現在106の組織がパートナーシップとしてKQLに登録しており、その中にはUniversity College Londonを含むUniversity of London 系の大学を始めFrancis Crick Institute, Alan Turing institute, Wellcome Trust, British Library, British Museumなどの研究学術系があり、企業として世界をけん引するGoogleや大企業であるBT Groupなど、また自治体としてCamden やIslington Councilなどもある。また会員登録されている組織では7万人以上の雇用がある。

有名レストランやショッピングも楽しめる場所でもあり、気軽に訪れることができる場所でもあり、晴れた休日に訪れてたり、テニスのウインブルドンの試合や、サッカーW杯等の試合があるときは巨大スクリーンで大勢と楽しめるところでもある。

KQはロンドンの他に2か所ある。Knowledge Quarter LiverpoolとKnowledge Quarter Oxford Road Corridor (マンチェスター)である。それぞれ独立した組織で運営されている。Knowledge Quarterと名乗る場合、その地域住民や地域に関わる機関に合意。まず他のKnowledge Quarterと区別ができる独自の強みや専門性を明確にする必要がある。また地域の活性化をするために長期的なビジョンを持つことも重要である。では残りのKnowledge Quarterも簡単に紹介する。

Knowledge Quarter Liverpool

2000年代半ば以降、リバプール市内中心部の大規模な再開発が進み、2016年にKnowledge Quarterが発足した。

この450エーカーのエリアは、科学、健康、テクノロジー、教育、音楽、クリエイティブ・パフォーマンス・パフォーミング・アーツなどの分野で世界トップクラスの企業や機関が集結しており、特に大学や病院が集中している。また、感染症や公衆衛生、材料化学、人工知能などの医療研究分野で世界的な専門性を有し、Liverpool School of Tropical MedicineやLiverpool Science Parkなどの先進施設がその中心となっている。

Knowledge Quarter: Oxford Road Corridor (Manchester)

Knowledge Quarterの運営組織は2016年に設立されたが、その歴史は1750年から始まっている。マンチェスター市中心部から南に延びるオックスフォード・ロードは、原子核の発見や現代のコンピュータの発明など、文学や政治史と深く結びついた場所である。この通りには、The University of ManchesterやManchester Metropolitan University、英国最大のNHSを含む多くの知識、ビジネス、文化遺産が集中している。エリア内には442,000人が居住し、7,100の企業が集まり、86,000人が雇用されている。マンチェスターのライフサイエンス企業の50%と、グレーターマンチェスターのイノベーション資産の50%がこの地域に集まっている。



キングスクロスを中心に半径1マイルの範囲
(Knowledge Quarter London ウェブサイトより)

Events organised/supported by JSPS London from July 2024 to October 2024

- ❑ JBUK Survival Seminar
@JSPS London lecturer Hall (Ground Floor)
4th July 2024
- ❑ The 30th Anniversary event at Royal Society
@ Royal Society (Conference Room)
3rd September 2024
- ❑ The 30th anniversary of JSPS London and the 20th Anniversary of our Alumni Association
@ Ashmolean Museum (Headley Lecture Theatre)
4th September 2024
- ❑ The Academy of Medical Sciences – JSPS London Symposium
“Japan-UK Policy workshop: Resilience of health and public health systems”
@ No. 11 Cavendish Square
15th – 16th October 2024
- ❑ Information Event:
@ Imperial College London (11th September 2024)
@ University of Nottingham (7th October 2024)

Future events organised/supported by JSPS London

- JSPS- RSE Symposium : Fission-Fusion Perspectives Complex Issues
@The Royal Society of Edinburgh
5th December 2024
- Information Event:
@Durham University (3rd December 2024)
@Newcastle University (6th December 2024)
- Symposium and Seminar
@University of Sussex (3rd December 2024)
@University College London (3rd February 2025)
@University of Manchester (28th February 2025)

JSPS Fellowship Programmes & International Collaborations

Application Schedule for FY2024/2025/2026

Fellowship Programmes

*The Pre/Postdoctoral Short Term programme is also managed by other JSPS overseas offices in Europe and USA independently. For more information, please check their websites.

Programmes	Suitable Applicants	Apply to	Recruitment	2024		2025-												
				Nov	Dec	Jan	Feb	Mar	Apr	May	Jun	Jul	Aug	Sep	Oct	Later		
Summer Programme (LON call)	Pre/Postdocs	JSPS LON	FY2025		16th							FY2025 Core period: Jun-Aug						
Pre/Postdoctoral Short term (1-12m)		JSPS TYO	1st Call (FY2025)													TBA		Apr2025-Mar2026
			2nd Call (FY2025)			10th								Aug2025-Mar2026				
		3rd Call (FY2025)										6th						Dec2025-Mar2026
		JSPS LON	1st Call (FY2025)			20th				Apr2025-Mar2026								
			2nd Call (FY2025)									TBA						Nov2025-Mar2026
Postdoctoral Standard (12-24m)	Postdocs	JSPS TYO	1st Call (FY2026)											TBA			Apr2026-Sep2026	
			2nd Call (FY2025)						Early Apr						Sep2025-Nov2025			
		Royal Society	FY2025						TBA					Sep2025-Nov2025				
		British Academy	FY2025			11th				Apr2025-Nov2025								
Invitational: Long Term (2-10m)	Mid Career to Prof level	JSPS TYO	FY2025											TBA			Apr2026-Mar2027	
Invitational: Short Term (14-60d)			1st Call (FY2025)											TBA			Apr2026-Mar2027	
			2nd Call (FY2025)						25th							Oct2025-Mar2026		
BRIDGE Fellowship	Alumni Members	JSPS LON	FY2025		15th												Jul2025-Mar2026	

Application period or deadline

Fellowship starting time

International Collaborations

*The following schedule is for the researchers on the Japanese side.

Programmes	Suitable Applicants	Apply to	Duration	2024		2025-												
				Nov	Dec	Jan	Feb	Mar	Apr	May	Jun	July	Jul	Aug	Sep	Oct	later	
JSPS London Symposium & Seminar	Alumni & JBUK Members	JSPS LON	Symposium: 1-3 days Seminar: 1 day				10th					Jun2025-Feb2026 (TBA)						
Bilateral Programme [A]	Research Groups	JSPS TYO	Joint Project: Max 2 yrs												TBA		TBA	
Bilateral Programme [B]		JSPS TYO	Joint Project: Max 2 yrs Joint Seminar: Max 1 week													TBA		Apr2026-Mar2028 (MAX) Apr2026-Mar2028 (MAX)
Core to Core Programme	Institutions/ departments	JSPS TYO	Max 5 yrs														TBA	Apr2026-Mar2031 (Max)
JRP-LEAD with UKRI	Universities and reserch institutions	JSPS TYO	3 years												TBA			Nov2025-May2029 (Max)

Application period or deadline

Project starting time

*The Month of deadline may change.

*When you apply to JSPS Tokyo, please note that the application periods and deadline above are for the head of the host institution to submit the applications to JSPS Tokyo. The time frames for host researchers to submit their applications to their institution are normally earlier. Therefore, Fellowship candidates must discuss their preparation schedules with their host researchers. Please also check each website for more details.

Programme Contact Information List

Fellowship Programmes

■ Summer Programme
(London call) [JSPS London](#)

■ Postdoctoral Standard
[JSPS Tokyo](#)
[The Royal Society](#)
[The British Academy](#)

■ Invitational Fellowships
[JSPS Tokyo](#)

■ Pre/Postdoctoral Short Term
[JSPS Tokyo](#) [JSPS London](#)

■ BRIDGE Fellowship
[JSPS London](#)

International Collaborations

■ JSPS London Symposium/Seminar Scheme
[JSPS London](#)

■ Bilateral Programme
[JSPS Tokyo](#)

■ Core to Core Programme
[JSPS Tokyo](#)

■ JSPS International Joint Research Programme
[JSPS Tokyo](#)

今号では、“ぼりーさんの玉手箱”および“山田さんの徒然なるままに”はお休みいたします。
次号77号ではJSPS London 30周年記念の特別号をお届けする予定です。(12月発行予定)
The next issue, 77, will be a special issue celebrating JSPS London's 30th anniversary. (published in DEC)

Follow us on ...

- For Japanese researchers in the UK or RoI/ 在英・アイルランド日本人研究者の皆様、ご希望の方に、JSPS London が開催するイベントのご案内やニュースレター等をお届けしています。対象は、英国・アイルランドの大学・研究機関に所属する研究者(ポストドク・大学院生含む)及び在英日系企業研究所の研究者の方々です。下記リンクにてご登録ください。

<https://ssl.jsps.org/members/?page=regist>



- JSPS Tokyo が運営するJSPS Monthly (学振便り)は、JSPS の公募案内や活動報告等を、毎月第1月曜日にお届けするサービスです(日本語のみ/購読無料)。情報提供を希望される方は、下記のリンクにてご登録ください。

<https://www.jsps.go.jp/j-mailmagazine/index.html>



日本学術振興会 ロンドン研究連絡センター(JSPS London)
14 Stephenson Way, London, NW1 2HD, United Kingdom
Tel : +44 (0)20 7255 4660 | Fax : +44 (0)20 7255 4669
E-mail : lon-info@overseas.jsps.go.jp | <https://www.jsps.org>

JSPS London ニュースレター
監 修 : 小林 直人
編 集 長 : 妙見 由美子
編 集 担 当 : 山 田 泰 子